

Title	タラス戦考：序章
Sub Title	The battle of Talas : preliminary chapter
Author	前嶋, 信次(Maejima, Shinji)
Publisher	三田史学会
Publication year	1958
Jtitle	史学 Vol.31, No.1/2/3/4 (1958. 10) ,p.657- 691
JaLC DOI	
Abstract	The battle at Talas in Central Asia, fought between the Chinese army of T'any dynasty and the Arab and Iranian troupes of Abbassid Caliphate in 751 A.D., was not only significant from political and military standpoints, but it produced various interesting effects on the history of cultural intercourse between the West and the East. But the Chinese sources concerning this event are comparatively poor and the Arabic sources astonishingly scarce. The researches into the history of Heart of Asia in this period are admirably executed by E. Chavannes, W. Barthold, H.A.R. Gibl and other scholars. However, we cannot find any monograph which treats particularly this serious encounter. In my opinion, there still remain considerable parts to complement the studies of the predecessors. In this preliminary chapter, I wish to re-examine the relations and contacts between T'any dynasty and the Caliphate from the beginning to the day of Talas. As to the direct causes of the incident and the relating circumstances, I intend to publish my opinion shortly in the SHIGAKU, historical quarterly of Keio University.
Notes	慶應義塾創立百年記念論文集
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0661">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19581000-0661</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# タラス戦考——序章——

前 嶋 信 次

はしがき

タラス（タラーズ）河畔の戦は西暦七五一年の七月、玄宗皇帝治下の唐軍と、勃興して間もなかったアッバース朝創業の功臣アブー・ムスリムの派遣したアラブ軍との間に行われた。この戦こそ、いろいろな方面から大きな意義をもつものであった。ロシアのバルトーリドは「初期のアラブ史家はそころ西アジアで起りつつあった諸事件の記載に忙殺されていて、この戦いのことを述べていない。しかしトルキスタンの歴史においてまことに重大なものであったことは疑うべくもない。……中國とイスラムと、この二文明のうちのいずれがこの地域を風靡するかの問題を決定したからである」<sup>(1)</sup>とのべている。また中國の季羨林氏も一九五四年に発表した論文中で、怛邏斯<sup>タラス</sup>の戦について新舊唐書などに見える記述はすべて非常に簡略であるが「實際上はこの戦役の影響は異常に重大なものである。中國の造紙法の西方傳播はすなわちこの戦役と關係があつた」と記している。<sup>(2)</sup>

西トルキスタンで長い間對峙してきた唐朝の勢力と、イスラム帝國のそれとが、この一戦でついに勝敗を決し、前者の全面的後退となったという説にしても、製紙法が西アジアに、そしてやがて歐洲にも傳わっていったのはまたこの戦

の結果であつたという説にしても、右の二人のほか、すでに多くの人によって説かれてきたことである。たしかにタラスの戦はこの二つのことの重要な原因ではあつたが、唐の勢力の後退については他にも種々の要因があつたことは明かで、英國のギップ教授も早く「この戦は西方における中國勢力の終末を劃したものはあるが、それは外部からの壓迫のためというよりも、むしろ内部からの崩壊の結果であつた」とし、天寶末年の唐朝社會の混亂をほのめかしている。<sup>(3)</sup> また製紙法の西方傳播についても異説がないわけではない。たとえばアリー・イブン・ムハンマドという人の説によれば、それより百年も早く、六五〇年ころにサマルカンドに傳わり、七〇六年頃には早くもメッカでも製造されるようになったとある。<sup>(4)</sup>

このような異説はあるけれど、タラスの會戦は當時の世界を代表した二大文明圏が互に大軍を派して爭つた唯一の例であつた。その政治的影響も大きかつたし、東西文化交流の見地からしても、様々の興味深い問題を包含していることは議論の餘地がない。ではどうしてこの戦いが起つたのか、これについて特に詳しく研究したものを見ないし、從來の説とやや異なる結論も得たので、以下に卑見を述べたいと思う。ただし、その遠因をも一通り記している間に意外に紙數を費すことになったので、ここには特に「序説」の部分のみをかかげ、「本説」の部分のうちに「史學」誌上で發表したい考である。

## 一、二大勢力の接近

唐朝は英主太宗の貞觀年間（六二七～六四九）中から幾多の躊躇のち西域經營に著手し、アラビアのイスラム教徒

は第二代のカリフたる偉人ウマルの在職中（六三四～六四四）から東方經略の歩を進めはじめた。その時期が符合していることにも興味をひかれるのである。

玉門關外の諸胡國のうち、まず唐の威令に服したのは伊吾(Hami, Khamil)で、貞觀四年（六三〇）のことであり、次が高昌國(Gocho, Karakhoja)で、その十年後の貞觀十四年であつた。唐書（卷二二上）高昌傳によると、遠征軍をおこすにあたり「羣臣諫めて萬里に行く兵の志を得がたきこと、かつは天界の絶域これを得るといへども守るべからざることなどをもってしたが、帝は聽きいれなかつた」とあつて、高昌をさえ天界の絶域と考えてためらつたのである。しかし同二十一年（六四七）には焉耆(Karashahr)を、その次の年には龜茲(Kucha)を平定し、さきに高昌を平定した際に置いた安西都護府を龜茲にうつした（舊唐書卷三）。

イスラム教徒のアラビア半島外への進出も大體、唐の西域進出と時を同じくし、六三二年（貞觀六）に予言者マホメットがメディナで瞑目したところに早くもその氣配を示した。六三六年（貞觀一〇）にはシリアの死命を制したヤルムーク河畔の大勝を得、翌三七年にはイラク地方の運命を決したカーディシーヤの勝利、六四二年（貞觀一六）にはイラン高原に上つてニハーワンドの決戦で、サーサーン朝ペルシャの最後の大反撃を粉碎してしまつた。

タバリーの史書によると、ペルシャ皇帝ヤズディギルド三世はカリフ、ウマルが派遣したアハナフ・イブン・カイスに追跡されて東に走り、フラァサーンの町々をかくれ歩いたのち、バルフに至り、突厥の可汗とシナの子とに書を送つて援助を求めた。シナの子も一軍を送つたが、ヤズディギルドは突厥可汗に保護され、フェルガーナに入り、ウマルの在世中はそこで暮していた。ウマルが暗殺され、ウスマーンがカリフとなると、ヤズディギルドはフラァサーンのメ

ルヴにもどり、そこで命をおとした<sup>(5)</sup>としてある。

前述した如く、そのころ唐はやっと高昌まで進出したのみで、敗残のペルシャ皇帝を救うがためにはるばると一軍を送るというようなことは考え得ぬし、漢土の史籍にもこれに関連した記録を見出すことは出来ない。恐らくタバリーは一つの傳説を書き残したのにすぎぬであろう。

タバリーは更にその次に別説を傳えて、ヤズディギルドはアハナフの一萬二千騎に追われてメルヴからメルヴ・ル・ルド *Marv ar-Rūd* にはしり、そこから突厥可汗、ソグドの王およびシナの天子にそれぞれ求援の使を出した。ついでバルフをへてアム河を越えたが、ソグドについたとき、かれがシナにつかわした使者が、シナ天子の返書をたずさえて歸ってくるのと遭った。その書面によれば天子（唐の太宗）は、君王というものは互に相助くべきものではあるが、御身の使節からイスラム教徒とはいかなる人々であるかを聞くにつけても、そのような宗教や眞剣さをもつ民は全世界をも征服すべく、何人も退けることは出来ないであろう。故に御身は身の安全を保つがためには彼等と和平を結ぶほかに方策はあるまいと思ふ云々と諭してあつた。そこでヤズディギルドはフェルガーナに身を寄せたとして<sup>(6)</sup>いる。これもまたそのままに史實と受取るとは困難であるが、前説よりも實際に近いのではあるまいか。ヤズディギルドの使らしいものが長安に現われたことは中國側の記録にも見えている。

冊府元龜（卷九七〇）によると、波斯の使は貞觀十三年（六三九）二月に長安に來たとしてあるが、これはペルシャの首府マダーイン（クテシフォン）がイスラム軍の驍將サード・イブン・アビー・ワッカースに攻めおとされ、皇帝ヤズディギルドが東走した翌々年のことで、ニハーワンドの決戦は貞觀十六年に起っているから、あたかも、その間の時期、つ

まりヤズディギルドが四方に兵を求めて回復の策をめぐらしていた間にあたっている。唐書西域傳波斯國の條には「伊嗣俟(Yazdigird)立。貞觀十二年使者波似半(Bizhan か?)を遣わして朝貢す。また活褥蛇を獻す云々」とある。活褥蛇というのは身長八九寸ばかり、形は鼠に似て青色、よく穴に入つて鼠をとるといふ奇獸であるが(舊唐書西戎傳波斯國の條)、これを獻じたのは貞觀十三年(または十二年)の遣使のときではなくて、貞觀二十一年(六四七)のことかも知れない。ヤズディギルドの使者が貞觀二十一年三月に長安に來て活褥蛇を獻じたことは舊唐書波斯傳、冊府元龜(卷九七〇)などにも見えている。佛國のシャヴァンヌは貞觀十二年の使者をもつて求援のためのものと解しているが、これはいかにもそうありそうなことである。

ニハーワンドで敗れたのち、ヤズディギルドはイスラム軍に逐われてフラースーンにはしり、高宗の永徽二年(六五一)ころ、メルヴ附近の水車小屋で非業の死をとげた。舊唐書波斯傳には「伊嗣俟(俟が正しいと考える)は懦弱で、大首領の逐うところとなり、ついに吐火羅に奔らんとし、いまだ至らずして大食兵の殺すところとなる」とあるが、これはメルヴ近郊の土民に殺されたとするタバリー等の所傳と大體において一致している。

いずれにせよ、西域地方に對し積極政策をとりはじめていた唐朝の人々がイスラム教徒の活動に對して關心を抱くようになったのは、恐らくはサーサーン朝の滅亡の報や、その最後の帝ヤズディギルドの求援使節などに接したところからであつたらしい。

サラセン帝國の使者がはじめて長安に姿を現わしたのは高宗の永徽二年(六五一)末のことであつた。舊唐書西戎傳大食國の條によると「永徽二年、はじめて使を遣わして朝貢す。その姓は大食氏、名は噉密莫末膩(amir al-mu'minin、

イスラム教徒の支配者の義)。自らいう、國ありてよりすでに三十四年、三主を歴たり」とある。あたかも第三代のカリフ、ウスマーンの在位八年目にあたっている。國ありてより三十四年とあるのは、ヘジラ暦での年數をいつているのであるが、永徽二年はその第三〇—三一年にあたる。舊唐書（卷四）高宗本紀によれば大食國の使者は永徽六年六月にも來朝したが、この年七月十日までがヘジラ暦第三十四年にあたるから、國ありてよりすでに三十四年であると陳述した所の使節は恐らくこの二回目のもものにちがいない。

一方、アラビア側の古傳によるとニハーワンドの戦後、ムスリム戰士はヤズディギルドを追ってウマルの在世中（六四四年以前）に早くもアム河南岸のトカーラに達し、それから約十年後のウスマーンの治世にはフラーサーン地方を平定したという。<sup>(8)</sup>メルヴを中心とするこの地方を東方經略の根據としてバルフ、カーブル、ガズナなど現在のアフガニスタン國內の諸名邑を攻めやぶり、西曆六五四年（永徽五年）ころには遂にアム河を越えて、ソグディアナ地方のマイムルグ Maymurg へ侵入した。<sup>(9)</sup>そこはサマルカンドの南に接した肥沃な地域で、樹林に蔽われ、數多くの村落がつからなっていた。この事件は唐朝にも報告されたと見えて唐書西域傳康國（サマルカンド）の條下に「米はあるいは彌末<sup>マイムルグ</sup>といい、弭秣賀ともいう。北に百里康と距だつ。其君は鉢息德城に治す。永徽の時大食の破る所となる」とある。アル・マクディシーの地理書（九八五年頃）によると、「この地にはサマルカンドの王イフシード Ikshid（稱號）の居所があつて、その城がたっている」とある。<sup>(10)</sup>これが或は鉢息德城かも知れない。

ただにアラブ軍の侵入の報が長安にもたらされたのみではなく、唐の天子は一軍をソグディアナまで送ってこれを救うのではないかという風評まで行われたらしい。同じく唐書の康國傳に「何は或は屈霜爾迦 Kushāniyah と云ふ。……

永徽の時上言していうには『聞くなり唐は師を出して西討すと。願くは糧を軍に輸さん』。俄にしてその地をもって貴霜州となし、その君昭武婆達地に刺史を授く云々」とある。何國すなわちクシャーニーヤ（またはクシャーニー）はサマルカンドの北方約十四リーグほどにあり、アル・マクディシーの地理書によれば「クシャーニー Kushānī」とイシユティーハン Ishitkhan（またはイシユティーハン Ishitkhān。クシャーニーヤとサマルカンドの中間にあたり、サマルカンドとはソグド河を隔てている）と、双方とも立派な町で、その住みよさ、肥沃さ、卓越していることは他に類がない云々」とある。<sup>(12)</sup>イシユタフリー（九五一年頃）も「クシャーニーヤはソグド地方で最も人煙の濃やかなところである」といい、<sup>(13)</sup>イブン・ハウカルも「クシャーニーヤはソグドの諸都市の心臓で、その住民はソグド諸都市の民のうち最も富裕である」とのべている。<sup>(14)</sup>そのころは獨立の王國をなして、タバリーの書などにもクシャーン・シャール Kushānshāh（クシャーン王）という稱號が見えるという。<sup>(15)</sup>イブン・フルダードビーの地理書には、「フラーサーンとマシュリク（東國）の諸王の稱號」と題する一節があり

#### Malik Ma-warā' al-Nahr Kushān-shāh

とある。<sup>(16)</sup>マーワラーン・ナハル（トランスオクシアナ）の王をクシャーン・シャールというのであるから、ある時代にはクシャーニーヤの王が、その地方一帯の支配者とみとめられていたものらしい。いずれにせよ「唐軍が西征するならば、糧食はひきうける」と申し送ったのも、それだけの實力があったからこそであろう。隋書（卷八三）西域傳によると、この國（何國）の王は千人の勝兵を擁し、金羊の座にすわり、煬帝の大業年間（六〇五―六一六）に使を遣わして方物を貢したとのことであるが、唐書（二二下）西域傳にはその王をめぐる不思議な風俗を傳えてある。「（王）城の

左に重樓がある。その北（面の壁）には中國の古帝の、東（面）には突厥の、（南面には）波羅門の、西（面）には波斯や拂菻（ローマ）などの諸王（の像）をえがいてあって、その君は朝ごとにここに詣で、拜しては則ち退く」というのである。眞偽のほどはわからないが、中央アジアの商業國の王としては、こうしていわば得意先の君王の像を拜することもありそうなることもある。またそのような國情であって見れば、ローマやペルシャを侵略しつつ迫ってきた新興のイスラム勢力に強い反感を持つということもまた當然の成行と見なければなるまい。

アジアの心臓部といわれるソグディアナをばさんで唐朝とサラセン帝國と、この二大勢力の拮抗對立に至る氣配は早くもこのころからほの見えてきたといえるであらう。

## 二、西突厥故地の經營

西進する唐の勢力と、東進するイスラム勢力との間にあって、中央アジア一帯に支配權をのばしていたのは西突厥であった。かれらはイシク・クルの西、碎葉、千泉あたりを中心に南ははるかにインドの西北部までその威令を及ぼしていた。これに對しまず大打撃を與えたのは唐で、高宗の顯慶三年（六五八）に將軍蘇定方等はウイグルの兵をも加えて西突厥の可汗阿史那賀魯の本據をつき、これを石國（シャージュ、今のタシュケント）に走らした。更に唐の副將蕭嗣業は長驅してシル・ダリヤのあたりまで追撃し、可汗をとらえて歸った。唐朝は西突厥の本部をばその年十一月に、州縣にわかち、六都督府を置くこととなった。<sup>(1)</sup>ただし本部の地とは、大體、天山以北、東はバルクル、西はアレクサンダー山脈に至る地域で、ほぼ現在のソ連邦内のキルギズ共和國の範圍にあたっている。アム、シル二河にはさまれたソグディ

アナ（トランスオクシアナ）の地方も西突厥に役屬していたから、西突厥を征服した唐朝の勢力は自然とこの地域にま  
でのびる形勢となって來た。唐は太宗の死後、一時安西都護府を中絶させていたが、高宗の永徽二年にまた高昌の故地  
に置き、西突厥を平定した際、顯慶三年五月にこれを龜茲に前進させている。資治通鑑（卷二〇〇）の、その年の條に  
「十一月、阿史那賀魯すでに擒えられる。……甲午、昭陵に献ず。敕してその死を免ぜしむ。その種落を分つて六都督府  
となし、その役屬する所の諸國にはみな州府を置き、西は波斯に盡く。並に安西都護府に隸せしむ」とある。すでに諸  
家の論じた如く、これはいわば机上の編成で、各地の王に一片の文書を與えた程度のものにすぎなかったであろうが、  
それにしても唐が西突厥の舊支配地を全面的に引受ける氣がまえていたことは否めない。資治通鑑（二百）顯慶四年の  
條には「九月、詔して石（Shash）米（Maymurgūh）史（Kish）大安（Bukhārā）小安（Kharghān）曹（Ishitkhān  
或は Ushrusanah）拔汗那（Ferghāna）怛怛（Ephthal）疎勒（Kashgar）朱駒半（Karghalik）等の國をもつて  
州縣府百二十七を置く」とある。また唐書西域傳には顯慶三年にかけて、拔汗那の渴塞城を休循州都督（府）とし、王  
「阿了參」を刺史とし、石國の瞰羯城をもつて大宛都督府とし、其王「瞰土屯攝舍提于屈昭穆」に都督を授け、米國を  
もつて南謐州とし、その君「昭武開拙」を刺史としたこと、同じく顯慶年中に史國を佉沙州としその君「昭武失阿喝」  
を刺史とし、大安國の阿濫を安息州とし、その王「昭武殺」をもつてその刺史とし、小安國を木鹿州とし、その王「昭  
武閉息」を刺史としたことなどが記してある。右のうち都督を授けたのは石國王のみで、他の國々の王はみな刺史に任  
ぜられた。ただし、ソグディアナの首邑サマルカンドについては、同じく唐書西域傳に

「康は一に薩末鞬という……貞觀五年に遂に臣たることを請う。太宗曰く『朕は虚名をとりて、百姓を害することを

惡む。かつ康がわれに臣たらば、緩急まさにその憂を同じうすべきも、師の萬里を行かんこと、いずくんぞ朕の志ならんや』と。しりぞけて受けず。……高宗の永徽の時、その地をもつて康居都督府となし、すなわちその王拂呼纒に授けて都督となす」とある如く、康國はまだ西突厥が滅びぬうちから唐に臣屬し、その王は都督を授けられたのであり、前述のごとく、その近くの何國（クシャーニーヤ）も永徽中に貴霜州とされ、その王が刺史に任ぜられた。唐書（四三下）地理志羈縻州の項に「太宗の突厥を平げてより、西北の諸蠻および蠻夷や内屬す。その部落について州縣を列置し、その大なるものを都督府とし、その首領をもつて都督とし、（その小なるものをもつて州とし、その首領をもつて）刺史とし、みな世襲するを得しむ。貢賦すといえども版籍多くは戸部に上らず云々」とあるが、この事情はソグディアナ地方についてもあてはまるものと思われる。

### 三、波斯の滅亡と吐火羅

西突厥を滅ぼした後、こうしてソグディアナ地方に一應の統治體制を整えた唐の勢力と、サーサーン朝ペルシャを打倒して東進してきたサラセン人とは、いよいよ直接に接觸することになったかというところではなかった。もう一つかなり廣い援衝地帯が兩者の間に残っていた。それは外ならぬ吐火羅である。これはまたアラブ側の史料にも Tukharistan としてしばしば現われる。トカラという名稱はギリシヤ系のバクトリア王國にとってかわつた民族名で、バルトリードはこれを月氏（月支）族の別名とし、Tokhar は主に種族的意味をもち、クシュ Kush（月氏）またはクシヤン Kushan（貴霜）は主に政治的意味をもつた呼稱であると解している。<sup>(19)</sup>そして「トカル（トハル）からトハーンリスターンという

地方名が起ったが、これはイスラム時代にはバルフとバダフシャーとの間のアフガニスタンの北部地方を、また廣義ではオクサス河上流の左右の諸支流に沿った全地域を包含していた。トカル族が住んでいた和闐ホケンの東方地域で發見された佛教文献の用語によって判斷すると、この種族はアリアン系であつた」とも述べている。<sup>(23)</sup> もちろん月氏の人種については異説もいくつかあるが、省略する。バルトリードはまた別の書で「トハリスターンという名稱はもっと遙に廣汎な意味にも用いられ、經濟的にはバルフに依存していたアム・ダリア兩岸のすべての州を包含するものであつた」とも云っている。<sup>(24)</sup> 大唐西域記（卷一）中で玄奘は「鐵門を出て都貨邏國に至つた。その地は南北に千里餘、東西は三千餘里、東は葱嶺（パミール）を距し、西は波刺斯（ペルシャ）に接し、南は大雪山（ヒンドウ・クシュ）で、北は鐵門に據っている。縛菟大河（Wakhsh）すなわちアム河）が中境を西流している。數百年（前）から、王族は嗣を絶ち、酋豪は力競し、おのおの君長を擅ホシイマイにし、川により險により、分れて二十七國となつてゐる。晝野區分するとはいへ、すべて突厥に役屬している」ときわめて明晰な説明をしている。玄奘は貞觀の初めと、同じく十八年ころと印度への往復の路で都合二回この地方を通つてゐるが、その最初の訪問時にすでに右のような政情であつた。唐書（卷二二下）吐火羅傳によると、そこは「古の大夏(22)の地で、挹怛（エフタル）と雜處している。勝兵十萬……其王は葉護（Yabgu）と號している云々」とある。ヤブグーはいふまでもなく突厥人の用いた貴人の稱號で、玄奘が往復路ともに訪れたときは、活國つまり今のクンドズ Kunduz 邊に據つてゐた。唐書によるとこの吐火羅葉護は唐の高祖の武徳年間にも、太宗の貞觀年間にも（冊府元龜によると貞觀九年と同十九年）更に高宗の永徽元年にも入貢したとある。タバリーによると、前述の如くサーサーン朝最後の帝ヤズデギルドはニハーワンドで敗れて、フラーサーンにのがれた。イスラムの將アハナフ

がこれを逐ってメルヴに入ると、更にバルフに走ったとある。<sup>(23)</sup> 藤田豊八博士は續高僧傳、及びイドリースィーの地理書をひいて吐火羅葉護の本據地は二つあつてバルフ附近が南牙、クンドズが北牙の所在地であつたと考へている。<sup>(24)</sup> して見るとこのタバリーの所傳をそのままに受取るとすれば、ヤズディギルドは吐火羅葉護の保護のもとに走ったこととなる。そのことの眞偽は別問題として、吐火羅葉護がアラブ軍に頑強に抵抗し、容易に屈服しなかつたことは東西の史料によつて明白である。マスーディーの「黄金牧場」によるとヤズディギルドは二男三女を残した。二人の王子のうち、兄をバハラーム Bahrām、弟をフィールーズ（これはアラビア式の發音で、本來はピールーズ Pīrūz）といつたとある。<sup>(25)</sup>

このうち弟王子について、唐書西域傳波斯國の條に、伊嗣俟（ヤズディギルド）が吐火羅に奔ろうとして、半道で大食のために擊殺されたのち「子卑路斯は吐火羅に入りて以て免かる。使者を遣わして難を告ぐ。高宗は遠くして師（を送る）べからざるをもつて謝遣す。たまた大食解いて去る。吐火羅兵をもつてこれを納る」とある。資治通鑑はこれを永徽五年（六五四）夏四月のこととし、「伊嗣侯（俟の誤）の子卑路斯、吐火羅に奔る。大食の兵去る。吐火羅は兵を發し、卑路斯を立て波斯王として還る」とある。あたかもころころ、フラーサーン地方にカーリン Qarīn というペルシヤ系貴族を中心とする反亂が起り、アラブ人は一時その地方から撤退したので、吐火羅葉護はこの際にピールーズをそこに歸したのであらうという説もある。<sup>(26)</sup> しかしアラブ軍はまもなくフラーサーンを回復し、更に東進してきた。

これに對し何故に吐火羅葉護は頑強に抵抗したのであらうか。種々の原因はあるであらうが、その一つとして私が考へることは、熱心な佛教徒であつたがためではないかということである。佛教を偶像教として激しく憎んだイスラム教徒にたいしてはあくまで抵抗する外なかつたのではあるまいか。開元十五年（七二七）ころ、すでにアラブ人に征服さ

れた後の中央アジアを通過して安西に歸りつゝいた慧超法師は「(吐火羅)國王、首領及び百姓等は甚だ三寶を敬し、寺足り僧足り、小乘法を行ふ。食内及び慈悲等、外道に事えず」としているが、しかも「吐火羅の王住城に至る。名を縛底耶(Bactra, Balkh)となす。現に今、大窳(大食、アラブ)の兵馬、彼にあって鎮押し、その王は逼られ、走りて東に向ふこと一月程、蒲持山(Badakshān)に在りて住む。(そこも)大窳の所管に屬せらる」という政情の下においてであつた。<sup>(27)</sup>バルトールドは「トルキスタン小史」の中で「佛教はサマルカンドおよびその他の地方ではイスラム以前の時代に死滅したが、(廣義における)トハリスターンではイスラム征服時代まで、それが相變らず優勢な宗教として残っていた」といい、<sup>(28)</sup>こういう「佛教イラン」がイスラムに征服された後にも、文化的には種々の點でかえって征服者側に打克つたことを述べている。<sup>(29)</sup>

吐火羅葉護はイスラム教國に敵對したので、當然の成行で唐朝に心を寄せ、その援助に期待したらしい。そのような關係から、ソグディアナ地方に府州を置いてから二年ほど後、龍朔元年(六六一)に吐火羅葉護の勢力範圍十六國にも都督府を置くこととなつた。舊唐書地理志には「龍朔元年、西域の吐火羅、塞に款す。乃ち于闐以西、波斯以東の十六國にみな都督を置く」とあるが、このときの吐火羅の使は、サーサーン朝の王子ピールズの上奏書をももたらしたものの如く、同じく舊唐書波斯傳には「龍朔元年(波斯王子卑路斯)奏して、しきりに大食に侵擾せらるるにより、兵の救援を請うという。詔して隴州南由縣令王名遠を遣わして西域に使し、州縣を分置するに充つ。因つて其地の疾陵城を列して波斯都督府となし、卑路斯に授けて都督となす」とある。大サーサーン朝も末路においてはアフガニスタンの一角あたりで名義上は唐の一都督府ということになつたのである。唐書(四三下)地理志によつて補足すると、このときの

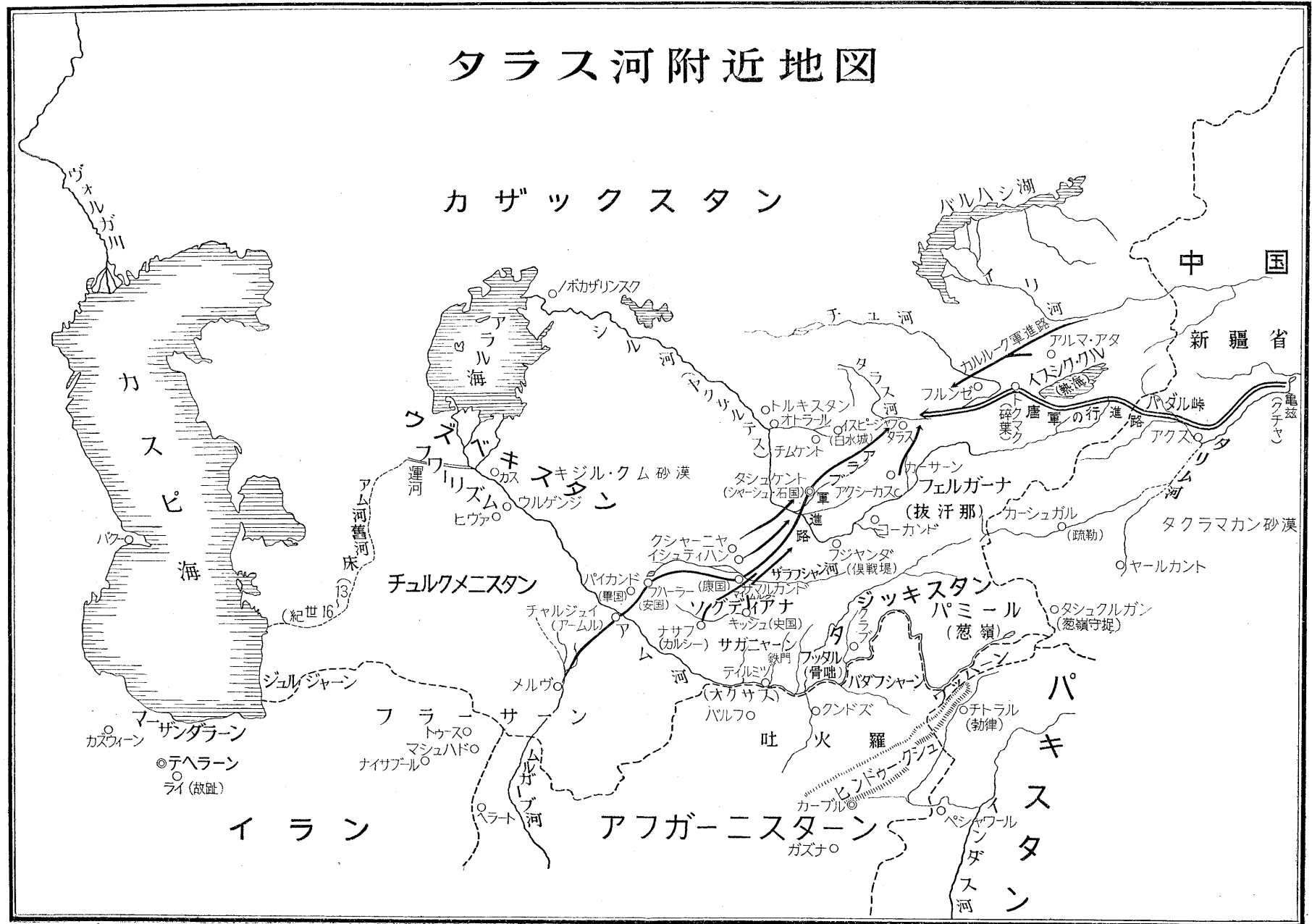
王名遠の任務は「吐火羅道置州縣使」というのであり、唐會要（七三）によると彼は吐火羅國に紀念碑をたて、また西域圖記を進めたとある。于闐より以西、波斯以東の凡そ十六國を唐の版圖として編成し、それぞれの王都を都督府とし、その屬部を州縣としたのであるが、凡そ州は八十八（または八十）、縣は百十、軍府は百二十六に達したとある。資治通鑑（卷二百）龍朔元年六月癸未の條には「吐火羅、嚙唃（エフタル）罽賓、波斯等の十六國に都督府八、州七十六、縣百十、軍府百二十六を置き、並びに安西都護府に隸せしめた」とあって、州の數が唐書とややことなるし、都督府の數も半減している。いまこれらについて詳細に考えることは紙數が許さないが唐書地理志によると、一、月支都督府を吐火羅葉護の阿緩城（Warwaliz, Kunduz）に。二、大汗都督府を嚙唃部落の活路城に。三、條支都督府を訶達羅支國（Arokhaj, Zabulistan）の伏寶瑟顛城に。四、天馬都督府を解蘇國數瞞城（Shūmān）に。五、高附都督府を骨咄施國（Khuttal）沃沙城に。六、修鮮都督府を罽賓國（Kapisa）の遏紇城に。七、寫鳳都督府を帆延國（Bāmiyān）の羅爛城に。八、悅般州都督府を石汗那國（Saghāniyān）艷城に。九、奇沙州都督府を護時犍國（Guzgān, Juzjān）遏蜜城に。一〇、姑墨州都督府を怛沒國（Tirmidh）怛沒城に。一一、旅獒州都督府を烏拉喝國麻竭城に。一二、崑墟州都督府を多勒建國（Tāliqān）的低寶那城に。一三、至拔州都督府を俱蜜國（Kumēdh）の楮瑟城に。一四、鳥飛州都督府を護蜜多國（Wakhān）の摸達城に。一五、王庭州都督府を久越得犍國（Quwādhīyān）の步師城に。一六、波斯都督府を波斯國疾陵城（Zarang）に、それぞれ置いたとある。舊唐書（四〇）地理志によると第八の悅般州から第十五の王庭州までは單に州と呼び、都督府とは稱してない。これがため資治通鑑は八都督府と云っているのである。これら諸國の大部分はアム河の中流より上流にかけてその兩岸に展開した吐火羅の故地で、一部は今のアフガニスタンの南部

からパキスタンにまでも及んでいる。みな當時は吐火羅葉護の勢力下にあったものと思われる。この状態はすでにこれから地域がアラブ人に征服されてしまった西暦七一八年ころにもなお大體は變化なかった如く、開元六年(七一八)に吐火羅王那都泥利がその弟僕羅を長安に派遣した際、後者が玄宗に奉った上書に「(玄宗開元六年十一月丁未、阿史那特勒僕羅上書して訴えて曰く) 僕羅の兄 (原文に克とあるのは誤) 吐火羅葉護は部下に諸國王・都督・刺史すべてで二百十二人を管しております。(それらの中で) 謝颺 (ザブリスターン) 國王は兵馬二十萬衆を統領し、罽賓 (カピシャ) 國王は兵馬二十萬衆を統領し、骨吐 (クツタルまたはフツタル) 國王、石汗那 (シャガーニヤーン) 國王、解蘇 (シューマーン) 國王、石匿 (シグナーン) 國王、悞達 (エフタル) 國王、護密 (ワッハーン) 國王、護時健 (グズガーン) 國王、范延 (バーミヤーン) 國王、久越德建 (クワーディヤーン) 國王、勃特山 (バダフシャーン) 王などはおのおの五萬の衆を領しております。僕羅らの祖父以來、上に列舉しました諸國の王たちはみな屬國として、私どもに臣事して参ったものであります云々」と云っているが、これで當時の吐火羅葉護の勢力範圍を察することが出来ると思う。

附記すべきはサーサーン朝の王子ピールーズによる波斯都督府が設置後、半年ほどで廢止されたことである。資治通鑑龍朔二年正月の條に「辛亥、波斯都督卑路斯を立てて波斯王となす」とあることによって明らかであるが、詳細な内情はわからない。しかもこうしてよし形ばかりでも、ともかくも復興した波斯國はまもなくアラブ軍に攻滅されたと見えて、唐書波斯傳には「卑路斯を都督に拜す」と記したあとにつづけて「俄にして大食の滅ぼす所となる。國すること能わずと雖も、咸亨中(六七〇)〜六七三)に猶入朝し、右武衛將軍を授けられて死す」とあってついに長安に来て晩年を終ったのである。舊唐書(卷五)によれば彼が長安についたのは高宗の上元元年十二月(六七五年一月)のことであつた。この

人は兩京新記（卷三）の傳える如く儀鳳二年（六七七）に長安に波斯寺という拜火教の寺を建てた。しかしそれから久しからずして世を去ったものと見え、資治通鑑（二〇二）の調露元年（六七九）六月の條に、西突厥の十姓可汗阿史那都支がその別師李遮匐とともに、吐蕃と結んで安西を侵したことをのべ「朝議、兵を發してこれを討たんと欲す。吏部侍郎裴行儉いわく『……今波斯王卒し、其子泥洹師、質となりて京師にあり。宜しく使者を遣わして送って國に歸らしむべし……』と。上はこれに従い、行儉に命じ、冊して波斯王を立てんとす。即ち（行儉を）安撫大食使となす云々」とある。通鑑の註に泥洹師は實錄には泥涅師、舊傳には泥湟師に、唐曆には泥洹師につくるとしてある。新舊兩唐書の裴行儉傳には「泥涅師」「泥涅師師」などとあるが、桑原博士の説の如くペルシャ人名 *Narses* の音譯であろうから泥涅師とする實錄が正確であろう。<sup>(31)</sup> ただし、正確なペルシャ名は *Narsi* であり、*Narses* はなまりである。ここで注意すべきは安撫大食使という任命である。唐が大食を安撫するという旗幟を立てたのはこれが最初であるが、思うにこれは一種のカムフラージュであって、直接の目的は突厥族の鎮壓にあった。通鑑前文の續きに、裴行儉はこうして行く兵をつのりながら西進した。阿史那都支は、行儉が安撫大食使と稱し、現に波斯王子を護送しているものだから安心し、何の備えもしなかった。そこを急襲され捕えられた。當時の西突厥は十部族に別れ、左の五部族を五咄陸部といつて碎葉 (*Suyab*) 今のソ連邦キルギズ共和國のフルンゼ市東方のトクマクあたり) の東に居り、右の五部族を五弩失畢部といつて、碎葉の西、タラス河あたりにかけていた。この十部族の長にはそれぞれ箭を授け、これを任命の印としたが、突厥族は符信を用いず、箭をもってこれに代えたので、唐ではこれを契箭と呼んだとある。<sup>(32)</sup> この際も行儉は都支を捕え、その契箭を出さして諸部の酋長を召したため、みな信用して集ってきた所を執えて碎葉城に送った。ついで計

# タラス河附近地図



を設けて遮匄をも捕えたので、西突厥の反亂は平定した。波斯王子ナルシーはいわばおとりを利用されたのである。果して碎葉まで来ると利用済みとして放棄されてしまった。通鑑には「波斯王を遣りて、自ら其國に還らしむ」とあるが、舊唐書波斯傳には「行儉、その路遠きをもって、安西碎葉に至りてかえる。卑路斯（泥涅師の誤）獨り返る。その國に入るを得ず。漸く大食の侵すところとなり、吐火羅國に客たること二十餘年、部落數千人ありしが、後に漸く離散す。景龍二年（七〇八）に至りてまた來りて入朝す。拜して左威將軍となす。いくばくもなく病卒し、その國遂に滅ぶ」としている。

#### 四、第三勢力としての吐蕃

唐がソグディアナや、吐火羅に都督府や州を置いて、いわゆる天可汗の威名を西方はるかにとどろかしていた顯慶年間から龍朔のはじめ（六五六―六六一）にかけての期間、イスラム教國は暗雲にとざされていた。六五六年に第三代カリフ、ウスマーンが反徒に虐殺され、予言者マホメットの近親のアリーが第四代カリフに推されたけれども、物情は騒然として、各地に反亂の氣配が現われていた。ことにシリアの總督ムアーウィヤ *Mu'āwīya b. Abū-Sufyān* との對立は政命的なものであった。この形勢を利して、フラサーンや吐火羅などの舊勢力は一齊に反旗をかかげ、アラビア人は一時、ニーシャープール以西に後退する外なかった。しかし王名遠が吐火羅に使した龍朔元年（六六一）にアリーはクーファの禮拜堂で、ハーリジュ派の刺客の手にかかり、ムアーウィヤによるウマイヤ朝政權が確立すると、二年後にはバルフ、ガズナ、カーブルに至る地域が再びアラブ族の支配下にもどった。六六五年にムアーウィヤの弟ジャード

Ziyād がバストラの總督となるや、ますます東方經略の歩をすすめ、從來のように各地の王侯に自治を許す制をやめ、フラーサーンのメルヴを中心に直接統治の方針にきりかえた。またバストラやクーファなどの基地から數萬家族のアラブ族をフラーサーンに移したので、いよいよ彼等がアム河以北に進出する體制が整ってきたのである。

この形勢に反し、唐の方は突如として龜茲以西の安西四鎮の地を強大な第三勢力のために奪い取られるという悲運に襲われた。その勢力というまでもなくチベット高原を本據とする吐蕃國である。吐蕃は舊唐書吐蕃傳に「北周や隋のころは、まだ中國との間を諸羌にへだてられていて、相通じなかったが、唐の貞觀八年（六三四）にその贊普（王）棄宗弄讚がはじめて使を遣わして朝貢した云々」とある如く、中國にとってはサラセンと殆ど同時に姿を現わしてきた新興國であつた。しかし、その位置が大食よりも遙に身近にあるため、幾倍かうるさい相手でもあつた。唐書吐蕃傳によると、棄宗弄讚は貞觀八年にはじめて唐に使を遣わす前にすでに「西域諸國共に之に臣たり」という程の勢力をもつていたとある。マースデーイによれば、サーサーン朝のアヌーシルワン帝（在位五三一—五七九）のときチベット王の使節がきて、鎧、楯、麝香その他の珍寶を贈つたといふ。<sup>(33)</sup> 吐蕃と北インドやペルシャなどとの交通はかなり古くから行われていたように思われる。唐書吐蕃傳に「戦うごとに前隊みな死して、後隊まさに進む」とある如く、彼等はすこぶる剛強勇武の民であつた。唐は貞觀十五年に文成公主を贊普の妻としておくり、吐蕃の方でも、豪族の子弟を長安に留學させたり、儒者や經典類を請うたりした。貞觀二十二年には王玄策がその援兵をかりて、マガダ國人と戦つたこともあるなど、兩國の關係は圓満であつたが、高宗の龍朔年間ころから形勢がかわり、唐・吐蕃二勢力の衝突が起りはじめた。こうして唐と大食とが、漸くアム河、シル河のほとりで雌雄を決しかねまじい状態となつたとき、その中間にこの

強大な第三勢力が割りこんできたのである。

唐と吐蕃との軋轢は中國史料の傳える所によれば高宗の龍朔二年（六六二）ころに始まっている。しかもそれは西突厥族のこととからんでいる。西突厥は可汗阿史那賀魯が唐に屈服した後、阿史那彌射と阿史那步眞とが唐の封冊をうけ、可汗と號してそれぞれ五咄陸、五弩失畢の各部族を分領したが、兩者は相和さず、互に他を倒して十姓全部を支配しようと思っていた如くである。唐書（二一五下）突厥傳によると、步眞は龍朔二年に颶海道總管蘇海政に、彌射が謀反の企てをしていると訴え出た。海政はその無實の中傷であることを察することが出來ず、天子の詔をもたらしたと稱して、彌射とその一黨をおびき出し、悉くこれを捕えて斬ってしまった。その歸途、蘇海政等は疎勒（カーシュガル）附近で吐蕃軍の威嚇を受けた。資治通鑑（二〇一）龍朔二年十二月の項に「（唐）軍還えりて疎勒の南に至る。弓月部また吐蕃の衆を引いて來り、唐兵と戦わんと欲す。海政、師老いたるを以てあえて戦わず。軍資をもって吐蕃に賂り、和を約してかえる。これより諸部落はみな興昔亡（可汗阿史那彌射）をもって冤となし、おのおの離心あり。繼往絶（可汗阿史那步眞）ついで卒し、十姓主なし。阿史汗那都支および李遮旬ありてその餘衆を收めて吐蕃に附す」とある。たしかに蘇海政の失策であった。弓月部の如き西突厥の餘衆が果していつごろから吐蕃と好みを通じはじめたのかは、事情がわからない。それから二年をへだてて麟德二年（六六五）にはカーシュガルもまた吐蕃と結んだらしく、冊府元龜（九九五）には、その年閏三月「疎勒、弓月兩國ともに吐蕃の兵を引いてもって于闐を攻む。西川都督崔知辯および左武衛將軍曹繼叔に詔し、兵を率いてこれを救わしむ」とある。この救助は成功したかどうかよくわからぬが、間もなくウーテン（ホタン）も吐蕃にくみしてしまい、兵を出して吐蕃を助け、安西都護府の所在地であり、唐の西域經畧の

大中心だったクチャを攻めた。舊唐書（卷五）には「咸亨元年（六七〇）夏四月、吐蕃寇して白州等一十八州を陷る。また于闐と衆を合して龜茲の撥換城を襲ってこれを陷しいる。安西四鎮を罷む。」とある。當時の安西四鎮は通鑑（二〇一）咸亨元年四月の條にあるごとく龜茲（クチャ）于闐（ウーテン）焉耆（カラシャハル）疎勒（カーシュガル）にあった。こうして西域一帯に吐蕃の勢力が乗り出してきて、唐の勢力は一時後退したが、唐朝はなお發展期にあったので、たちまち精力的な回復運動が開始された。

早くも咸亨四年十二月には弓月と疎勒二國の王が入朝して降を請うたが（舊唐書卷五）、これは唐の遠征軍がくると聞いて先手をうったものであった。通鑑（二〇二）咸亨四年十二月の條にも二國王の來降のことをしるし、「是より先、弓月は南は吐蕃と結び、北は（鐵勒種の）咽麴を招いてともに疎勒を攻めてこれを降した。天子は鴻臚卿肅嗣業をつかわし、兵を發してこれを討たしめた。嗣業の兵はまだ至らぬのに、弓月は懼れて疎勒とともにみな入朝した。天子はその罪を赦して國に歸らしめた」とある。翌上元元年（六七四）には于闐王伏闐雄も來朝したが（舊唐書卷五）、舊唐書（卷五）上元二年の條に「正月丙寅、于闐を以って毘沙都督府となす。尉遲伏闐雄をもつて毘沙都督となし、その境内を分つて十州となす。伏闐雄が吐蕃を撃ちし功ありしを以ってなり」とあるに見ると、ウーテン王は早くも矛を逆にして吐蕃と戦っているのである。

吐蕃はそのころ強盛をきわめ、舊唐書吐蕃傳によると黨項（タングート）及び諸羌の地を收め、東は涼・松・茂・嶲などの甘肅・四川の諸州と相接し、南は波羅門（インド）に至り、西は安西四鎮を攻め、北は突厥の地に至り、方萬里、「漢魏より以來、西戎の盛なることいまだかくのごときは有ざるなり」といわれた程であった。西突厥の餘衆をすべる

ことになった十姓可汗阿史那都支と李遮匐もまた吐蕃と結び、舊唐書（卷八四）裴行儉傳によれば「蕃落を煽動し、安西を侵逼し、吐蕃と連和す」とある。これに對し唐は裴行儉を安撫大食使ということにし、波斯の亡命王子ナルシーを護送するという謀畧をつかつて西突厥を平定したことはすでに前節に述べた如くであるが、冊府元龜（九六七）によると調露元年（六七九）に「碎葉・龜茲・于闐・疏勒をもって四鎮となす」とあって、早くも四鎮を回復したのである。

## 五、碎葉城の護り

裴行儉は勅命をうけて西に向う際、肅州の刺史をつとめていた王方翼を副使に推薦し、行を共にした。使命を果たした後、通鑑（二〇二）によれば「王方翼を留めて碎葉城を築かしむ」とある。これは唐人が天山以西に營んだ最初にして最後の城廓で、舊唐書（一八五上）王方翼傳によると「四面十二門を立つ。皆屈曲し、隱伏出沒の狀をなす。五旬にして畢る。西越（域が正しいであろう）の諸胡競い來りてこれを觀る。因って方物を獻ず」とある。目新しい築城様式を用いたものらしい。しかし方翼はこの城を守ることしばらくで、庭州の刺史に轉じ（唐書二〇王方翼傳）、そのあとは幾人かの碎葉鎮守使がここを守つたらしい。中宗の嗣聖十七年（則天武后の久視元年、西曆七〇〇年）には西突厥の可汗斛瑟羅が平西軍大總管という名の下に碎葉に鎮したといひ（通鑑二〇六）、同二十年（則天の長安三年、七〇三年）には突騎施部チユルゲンの烏質勒が碎葉を攻陥し牙帳をここに移したという、（通鑑二〇六。ただし元龜九六七卷は聖曆中六九八―六九九としている）。唐が碎葉を保つたのは僅に二十餘年間にすぎなかつた。詩人李白の祖先は隋の大業中に西域に流され、後に白の祖父のときこの碎葉に住むことになったが、やがて唐がこの地を失つたので、范傳正の李公新墓碑によると白の父は

「<sup>ヒツ</sup>潜かに（故國に）還った」とあり、中國歸着の時を中宗の神龍元年（七〇五）としている。アーサー・ウェーレーはこの所傳が正しければ李白の生れたのは碎葉の地か、または碎葉から歸る途中にちがいないと言っている。<sup>(35)</sup>ただしウェーレー氏は唐が碎葉を失ったのを高宗の永徽元年（六八二）としているが、<sup>(36)</sup>これはおかしい。通鑑によると、それより後、武后の萬歲通天元年（六九六）の三月に大食が獅子を献じたとある。これに對し姚璈が獅子は猛獸で肉のみを食う。「遠く碎葉よりして以って神都に至る。肉すでに得難く、極めて勞費である」と諫めたので詔を下し大食の献を停めしめたと新舊兩唐書の姚璈傳に見えている。サラセンの使者はこのとき碎葉まで来て、ライオンを献上することを申出たものと見える。またこれよりやや前の武后の長壽年間（六九二—六九三）に西突厥に反亂が起ったときも碎葉鎮守使韓思忠がその鎮壓に功があったと唐書突厥傳に見える。故に唐は少くも碎葉を西曆七〇〇年ころまでは守り、七〇三年には全くこれを放棄したのである。天山を越えて碎葉まで進出したのはサラセン帝國に備えるよりも、むしろ西突厥の遺民を押えて、吐蕃との連合をふせぐためではなかったかと思う。武后の垂拱二（六八六）年には一時四鎮を放棄したらしいが、長壽元（六九二）年には再び吐蕃からこれを奪回し、龜茲、于闐、疎勒、碎葉を四鎮とし、龜茲に安西都護府を置いたが、これは武威軍總管王孝傑が大に吐蕃軍を破った結果であった（舊唐書吐蕃傳上）。唐書西域傳龜茲國の條によると、こうして龜茲に安西都護府を復興し、三萬の兵をもって守ったけれども、沙漠の途を遠くへだて中國の人民はこの大軍の補給に苦しむこと甚しかった。「議するもの之を棄てんことを請う。武后聽かず」とある。則天武后が多たの犠牲を拂っても四鎮の維持を決意したのは何故であつたらうか。唐書（二二六上）吐蕃傳にはこの際右史崔融が奉った反對意見が記載してある。「……太宗文皇帝、漢の舊跡を踐<sup>ツ</sup>み、南山を並<sup>アラ</sup>せて葱嶺（パミール）に抵<sup>イタ</sup>る。府鎮を剖

裂して煙火相望む。吐蕃あえて内侮せず。高宗のとき有司狀なく、四鎮を棄てて有つ能わず。しかして吐蕃遂に焉耆の西に張入し、長鼓して右驅し、高昌を踰え、車師を歴て、常樂を鈔り、莫賀延磧を絶つてもって燉煌に臨む。いま孝傑一舉にして四鎮をとり、先帝の舊封を還えす。もしまたこれを棄てんか、これ自ら成功を毀ちて完策を破るなり。それ四鎮守なければ、胡兵必ず西域に臨まん。西域震えばすなわち南羌を威懾せん。南羌連衡せば河西必ず危し。かつ莫賀延磧は袤さ二千里、水草なし。もし北して虜に接すれば、唐兵度つて北すべからず。則ち伊西・北庭・安西の諸蕃悉く亡びん」と論じている。これで見ても前線を碎葉まで進めて、安西四鎮を復興し、極力これが維持を計ったのも、その最大の原因は吐蕃の跳梁を阻止するにあったことが窺われると思う。ただし碎葉はまもなく放棄し、もとの如く焉耆が四鎮の一つとされた。要するに唐とサラセンとの對抗はさして切實な問題ではなかった。しかし八世紀に入ると局面に變化が生じてくるのである。

## 六、クタイバ・イブン・ムスリム

八世紀に入る前に、アラビア人がアム河を越えてソグディアナに侵入を試みたことはいくどもあった。その経過の詳述はここには省くが、要するに永久的の占領ではなく、侵入軍が引あげれば、かの地の諸國はまた自由を回復した。局面が變つたのはウマイヤ朝のカリフ、アブドル・マリクが剛愎なハッジャージュ・イブン・ユースフ Hajjaj b. Yusuf をイラクの總督としてクーファに派遣してからであつた。ハッジャージュはクタイバ・イブン・ムスリム Qutayba b. Muslim をフラーサーンの知事に推薦したが（七〇四年）、この人の精力的な活動によってイスラム教國の勢力は

アム河以北にも確立し、シル河の北のシャージュヤその上流域のフェルガーナにも及ぶこととなつた。唐朝が多大の犠牲を拂つて支配につとめてきた西突厥族も、今や直接にアラブ人と接觸したのである。クタイバは唐朝の史籍にも畏密屈底波（'Amir Qutaiba の音譯）として現われている。その事蹟はタバリーをはじめアラビア語史籍に詳しく、ここでは略に従ふこととするが、大體の經過をギップ教授は次の如くに分けてゐる。

一、七〇五年。吐火羅の回復。

二、七〇六—七〇九年。ブハーラー（安國）の征服。

三、七一〇—七一二二年。アム河流域における權力確立とソグド（サマルカンドを中心とする地域）への進出。

四、七二三—七一五年。シル河畔諸國への遠征。<sup>(3)</sup>

右の期間の出来ごと中、特に一言を要するのは回曆八八年（七〇六年十二月十二日—七〇七年十一月三〇日）にクタイバがアームルからアム河を北にわたり、パイカンド（Paikand, Baikand 畢國）を攻略し、更に師を新にして再びブハーラーを攻めた際のことである。ブハーラーからアームルに至る通商路の中間にある要地パイカンドがアラブ軍に占領されたのを見たソグディアナ諸國は結束して起ち、フェルガーナの援軍をも招いて反撃、クタイバ軍を鐵門からテイルミッドの渡頭へ、アム河を渡ってバルフからメルヴへと追いしりぞけた。その際のことを記してタバリーは「チュルク軍はイスラム軍を迎え撃つた。これを率いたのはシナ皇帝の妹の子チュルクのケール・ブガーヌン Kur Bugha-nūn al-turki ibn 'ukhti maliki 'l-sin で、二十萬の軍をつれていたが、アッラーはイスラム軍に勝利を得さしめたもうた<sup>(39)</sup>」としている。ペルシャ語譯タバリーには、このときのチュルク軍を率いた人を「シナ皇帝の甥ケール・エンガ

「ブーン Kür Enghābun」としている。<sup>(41)</sup>この人物についてヴァムベリーは、チュルク族の君長であつたろうと言ひ、<sup>(42)</sup>バルトーリドは突厥施の可汗とし、<sup>(43)</sup>シャヴァンヌは東突厥軍を率いたクル・テギン Kiri-tegin 王子であつたと論じた。<sup>(44)</sup>シャヴァンヌの説はまことに面白いけれども、ギップは異説をたてて、これより三十年後に、突騎施軍の將としてタバリーなどに現われてくる Kür Maghānūn のことが誤傳されて、この戦のうちに入れられたのであらうという考を述べている。<sup>(45)</sup>卑見によれば、オルホンの碑文にクル・テギンの西征のことを傳えているから、シャヴァンヌ説の可能性も確かにあるが、少くもその人名はギップの説の如く突騎施の將の名と混同したものであらう。いずれにせよ、この戦に介入したのが唐軍ではなかつたことは明かである。

またクタイバは七〇九年にはついにブハーラーを征服する一方、バドギース王ニザク（エフタル族）や吐火羅葉護の大反亂を鎮壓し、後者を捕えてダマスクスに送った。これが前述の、七〇五年に弟僕羅を長安に派遣した葉護「那都泥利」であらう。

七一二年にはファアリズム（火尋）を征し、長驅してサマルカンド（康）を包圍した。王グーラク（烏勒伽）はシャーシュ、フェルガーナ等に援軍を求めて抵抗したけれども、ついに力盡きて降服した。しかし、心服したのでなかつた證據は、それから六年後に、グーラクが玄宗に送った書狀である。冊府元龜（九九九）によると、開元七年二月康國王烏勒伽は上表し「……すでに三十五年來、つねに大食賊と戦つて參りました。毎年大に兵馬を發してきましたが、唐朝では兵を送つて救助しては下さいませんでした。六年前に大食の元率將畏密屈底波が大軍をつれてここに來て、臣等と鬪戦致しました。臣等は大に賊軍を破りましたが、臣等の兵士もまた大に死損致しました。大食の兵馬は極めて多く、

臣等の力では敵することが出来なかつたのでございます。臣は城に入つて守りを固く致しましたが、たちまち大食に圍まれてしまいました。(敵は)三百の抛車をもつて攻めかかり、城に三つの大坑を穿つて、臣等の城國を破ろうとしたのであります。何とぞこの事情を察したまい、多少の漢兵を送つて此地に來らせ、臣の苦難を救助たまわりますよう。大食はただ一百年間の強盛を保つのみといわれておりますが、今年があたかも満期にあたります。もし漢兵がここに來ましたならば、臣等は必ず大食を破り得るのでございます下畧」とあるが、この書信を書いたと思われる開元六年(七一八)はあたかもヘジラ曆一〇〇年にあたっている。

またクタイバは七一二年末にサマルカンド方面を基地としてシャーシュ(石)、フジャンダ(唐書西域傳の俱戰提)カーサーン(唐書西域傳の渴塞城)等のシル河上流域の諸都市を攻略した。七一四年(開元二年)には重ねてシル河畔方面に入り、石國を基地にイスビージャーブ Isbijāb まで兵をすすめたといわれている。ここは後にアラビア語なまりでイスフイージャーブとよばれたところで、大慈恩寺三藏法師傳、新舊唐書(西域傳その他)に白水城または白水胡城として現われている。今のサイラムの地にあたり、シャーシュとタラスとの中間にあつて、東西交通路上の孔道にあつてゐる。

七一四年七月下旬、クタイバの保護者ハッジャージュ・イブン・ユースフが五十歳で世を去つた。クタイバは身邊に不安を感じ、兵を解いてメルヴに歸つた。<sup>(45)</sup>しかし、カリフ、ワリードは書簡を送つて安堵させ、また征戰の繼續を命じた。翌回曆九六年(七一四、九一七一五、九)にクタイバはワリードの後繼者で、その弟ではあるがハッジャージュの政敵たるスライマーンが政權をとる日の來るのを恐れていたので、家眷をサマルカンドに移し、自身は軍をフェルガー

ナに進めることになった。やがてカリフ、ワリードの訃報がとどいたが、その報をフェルガーナで受けとったとある。<sup>(43)</sup>そこで新カリフ、スライマーンに對し叛旗をかかげたが、部下にそむかれ、シル河畔で殺された(七一五年八月九月)。タバリーはまた別説として、クタイバはカーシュガルに入り、シナの天子の宮廷へフバイラ等十二名の使者を派遣したという物語りを傳えている。<sup>(43)</sup>舊唐書(西戎傳)大食國の條には、「開元初(七一三年)、使を遣わして來朝し、馬及び寶鈿帶等の方物を獻ず」とし、謁見の際、佇立して、拜禮を行わなかったので、役人がこれをとがめようとする、中書令の張説が奏して、大食は俗を殊にし、ことに義を慕って遠くから來たもの、とがめるべきでないと云ったので、玄宗は特にこれを許したとある。これは恐らくクタイバの遣わした使節かと思われる。タバリーもクタイバの使節フバイラの一行がその氣概で長安の天子を驚かしたことを傳説的に物語っている。またクタイバの遠征はフェルガーナまでであつて、カーシュガルまで入ることは出来なかつたろうといふことについては、すでにギップ教授が詳細に論じているので、<sup>(43)</sup>この説に首肯する旨を記するにとどめておきたい。

## 七、フェルガーナの運命

既述の如くクタイバは前後二回、フェルガーナに攻め入つた。回曆九四年(七一二、一〇一七二三、九)と同九六年(七一四、九一七一五、九)とであるが、右のうち少くとも第二回目には吐蕃軍もこれに協力したらしいふしが見える。資治通鑑(二二一)には開元三年十一月(七一五年十二月)の條にかけて「拔汗那は古の烏孫なり。内附して歳久し。吐蕃、大食と共に阿了達を立て王となし、兵を發してこれを攻む。拔汗那王は兵敗れて安西に奔り、救を求む。(張)

孝嵩、都護呂休璟に謂って曰く『救わずば則ちもって西域に號令するなし』と。遂に旁側戎落の兵萬餘人を帥いて龜茲の西數千里に出で數百城を不（下の誤りであろう）し、長驅して進む。この月、阿了達を連城に攻む云々」とある。張孝嵩は當時安西副都護の任にあった人物と思われるが、クタイバが第二回目にフェルガーナに侵入したのが開元三年四月以前で、この月にその地でカリフ、ワリードの計報を受けたというから、その際にフェルガーナ王は安西にはしり、その年十一月に早くも唐軍がフェルガーナの連城に、アラブ及び吐蕃が擁立した阿了達を攻めたのである。

では阿了達とは何者であろうか。フェルガーナはいうまでもなくシル河上流域のかなり廣大な盆地で東はカーシュガルにも通じ、中央アジアにおける重要な地域の一つである。漢代には大宛とよばれ、早く漢の武帝が西紀前一〇四—一〇二年にここに遠征軍を送ったほど、中國とは關係の深いところでもあった。また唐代になるとイラン系の民とトルコ系民との接觸地として複雑な政情を示している。隋書（八三）西域傳には鐵汗國として「葱嶺（パミール）の西五百餘里にあって……王の姓は昭武、字は阿利渠」とある。イラン系の昭武姓の王家がサマルカンド、ブハーラーをはじめ、トランスオクシアナの諸國に勢力を張っていたことは、白鳥庫吉博士はじめ、先人の詳論する所である。<sup>(49)</sup>しかるに唐の貞觀中（六二七—六四九）に西突厥の侵入によって、シル河以北のフェルガーナはトルコ族の支配下に移ったらしい。唐書西域傳（下）寧遠國の條に「寧遠はもとの拔汗那……西韃城に居る。眞珠河（シル）の北に在りて、大城六、小城百あり。（中略）貞觀中、王契苾、西突厥の瞰莫賀咄の殺す所となり、阿瑟那鼠匿その城を奪う。鼠匿死して、子遏波之立つ。契苾の兄の子阿了參王となり呼悶城に治す。渴波之は渴塞城に治す云々」とある。西韃城はブレットシュナイダーの說によると今のナマンガンの地で、中世のアラビア地理書には Aksikant, Akhsikath などと呼んである。<sup>(50)</sup>昭武

姓のイラン系王家がここにいたのだが、貞觀中、西突厥に國を奪われたので、一族の阿了參が復興運動を起し、呼悶城に都を置いたというのである。呼悶城を藤田博士はシル河南岸のフジャンダ *Khujandah* としているが、<sup>(51)</sup>アラビア史料によってこの説は裏書きされている。<sup>(52)</sup>一方河北を支配する西突厥系王家も阿瑟那（阿史那）鼠匿の子渴波之に至って渴塞城（アラビア地理書の *Qāsān*）に移ったのである。これは河南にイラン系の王家が復興するとアクシカントはシル河のすぐ北岸にあって不安なので、更にその西北のカーサーンの方を首府として選んだものと思われる。唐書寧遠國の條の前掲の文の續きに「顯慶初め、遏波之は使を遣わして朝貢す。高宗厚く慰諭す。三年（六五八）、渴塞城をもつて休循州都督となす。阿了參には刺史を授く。これより歳に朝貢す」とある。この文章はやや簡略にすぎるが、休循州都督府がおかれたのが、渴塞城で、阿史那渴波之は勿論その都督に件ぜられ、河南のイラン系の王、阿了參が刺史に任ぜられたと見るべきである。これによると、唐朝はシル河北のトルコ系王家を重んじ、河南のイラン系王家をやや從屬的に見ていたらしい。

右の如く見てくると開元三年にクタイバのアラブ軍及び吐蕃軍に攻められた拔汗那王とは恐らくシル河北のトルコ系の王であつて、吐蕃と大食とに立てられて王となった阿了達とは、阿了參の一族でイラン系の王家のものであろう。大食と吐蕃は南部のイラン系王家を助けて、北部のトルコ系王を追ったものと見える。隋書の阿利柒、唐書の阿了參、阿了達など、みな阿利（阿了）という名のついていることに注意される。

タバリーによると、クタイバは回曆九四年の第一回のフェルガーナ遠征にはまずフジャンダを屈服せしめ、その後カーサーン（またはカーシャーン）に進んでこれを征服したとある。このときは河南と河北との兩王家と戦ったのであ

るが、回曆九六年の第二回のときは河南の王を助けて、河北の王を討ったのである。張孝嵩が拔汗那王の求援に接し「救わずんば則ちもって西域に號令するなし」と云ったというが、實際これは西域に對する唐の權威にかかる問題であつた。そこで前述の如く孝嵩等の遠征軍が出發したので、本來ならばここで唐朝とウマイヤ朝のイスラム軍との間に衝突が起るべきであつた。所が實際はアラブ軍は現われず、資治通鑑の前掲の文の續きに「（この月阿了達を連城に攻む）孝嵩自ら甲を環し、士卒を督して急に攻む。已より西に至り、その三城を屠る。俘斬千餘級。阿了達、數騎と逃れて山谷に入る。孝嵩、檄を諸國に傳え、威、西域に振う。大食・康居・大宛・罽賓等の八國みな使を遣わして降を請う」とある。この記録をそのままに受取れば、殆ど無人の野を行く如き快勝であつた。實際、冊府元龜（九七〇）には開元四年七月、大食國の黑密牟尼（*Amir al-mu'minin* カリフの別稱）蘇利漫（スライマーン）が使を遣して上表し、金線織袍、寶裝玉灑池瓶各一を獻じたとある、張孝嵩の遠征はクタイバが横死した直後の<sup>(53)</sup>、イスラム勢力の混亂期に行われたのであるから、かくも華々しい成功を容易に收め得たものにちがいない。

しかし、ウマイヤ朝もクタイバの死後の混亂が収まると、たちまちにアム河以北の支配權を回復した。タバリーによると回曆一〇三年（西曆七二一、七一七二二、六）、新カリフ、スライマーンはサイード・イブン・アムル・ハリシー *Sa'id b. Amr al-Harishi* にブハーラーからサマルカンド、フェルガーナに至るトランスオクシアナ地方の支配權をあたえた。サイードはサマルカンドからフェルガーナに進み、王をその城塞に圍んだ。フェルガーナ王は一旦は和を請いながら、相手の油斷を見て、兵一萬をひきいて襲いかかり、多數を殺傷した。イスラム軍も奮い戦い、フェルガーナ王とその兵二千を殺して勝利を得た。更にその翌々年（七二四）にはアラブ軍はシル河を北に渡ってフェルガー

ナのを都を圍んだが、出撃してきた突騎施チユルゲンの王蘇祿のため手痛くたたかれて退却した<sup>(53)</sup>。こうしてフェルガーナはシル河南部だけがアラブの支配下にもどり、河の北岸の地は依然としてトルコ系の勢力が保持したらしい。七二六—二七一年ころ、インドからの戻り道に中央アジアを通過した慧超法師は「また康(サマルカンド)から東は、すなわちフェルガーナ國で、ここにも兩王がいる。縛又大河(シル)が中央を西に流れ、河南の一王は大寔(アラブ)に屬し、河北の一王は突厥の所管に屬している云々」<sup>(54)</sup>と傳えている。唐朝もまた河北の王を優遇したらしく唐書西域傳によると、玄宗の天寶三載(七四四)のこととして「その國號を寧遠と改め、帝(玄宗)は外家の姓を以って其王に賜い寶という。また宗室の女を封じて和義公主となしてこれに降す」とある。一方、ウマイヤ朝の方も河南の王を特別にいたわった如く、タバリ<sup>(55)</sup>によればトルコ族をふせぐ大任に當っているというので免税の特權を與えていたという。フェルガーナ國を貫流するシル河の線こそ、安史の亂で唐が西域經營を中止するまで、實にサラセン帝國との勢力の分界線として守りぬいた所だったのである。

フェルガーナで起るべく見えて、危くも免れ得た唐とサラセンとの衝突が、それから久しからずして、天山の西、タラス河畔で行われたのは何故であったか。これに關する考察はタラス戰考の本章として草することとし、ここでは、専ら彼我の激突に盛上るまでの形勢の推移をたどって見たのである。

#### 註

- (1) W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, London 1928. p. 196.
- (2) 季羨林「中國紙和造紙法輸入印度的時間和地點問題」(歴史研究、一九五四年四期)頁四二。

- (3) H. A. R. Gibb, *The Arab Conquests in Central Asia*, London 1923, p. 96.
- (4) E. Gibbon, *The decline and fall of the Roman Empire*, edited by O. Smeaton, Vol. V. Chap. LI. p. 308 note 2. William Ouseley, *The Oriental Geography of Ebn Haukal*. p. 300. 伊本・哈烏凱 Bibliotheca Arabico-Hispana tome 2. p. 9. 伊本・哈烏凱の引用文に據つてゐる。
- (5) At-Tabari, *Abu Jafar Muhammad, Tārikh al-Umam wa'l-Mulūk*, Cairo 1949, Vol. 3. pp. 245—246.
- (6) *Ibid.*, pp. 249—250.
- (7) Edouard Chavannes, *Documents sur les Tou-Kiue (Turcs) Occidentaux*, St.-Petersbourg 1903, p. 257.
- (8) シヤム・ヘンヌは伊嗣俟よりも伊嗣候の方が正しいと考へてゐるが (E. Chavannes, *Documents*, p. 171, note 5) 伊嗣俟の反響で「俟」が正しい Yazdi の音譯と考へてゐる。
- (9) Gibb, *Arab Conquests*. p. 15.
- (10) *Ibid.*, p. 15.
- (11) Al-Maqdisi, *Iḥsan al-taqāsīm fī ma'rifat al-aqālīm*, Leiden 1909. p. 279.
- (12) *Ibid.*, p. 279.
- (13) Al-Istakhrī, *Abū Ishāq Ibrāhīm, Kitāb Masālik al-Mamālik*, Leiden 1927, p. 323.
- (14) Ibn Ḥauqal, *Abū'l-Qāsim, Kitāb Sūrat al-'Arḍ*, Leiden 1938, p. 501.
- (15) W. Barthold, *Turkestan*, p. 96.
- (16) Ibn Khurdādhbih, *Kitāb al-Masālik al-Mamālik*, Leiden 1889, p. 40.
- (17) 舊唐書 (卷四) 本紀 唐書突厥傳 資治通鑑卷二百二十五。
- (18) 舊唐書 (卷四) 本紀 同 (卷四〇) 地理志。
- (19) W. Barthold, *Four studies on the history of Central Asia*, translated from the Russian by V. & T. Minorsky, Vol. 1. Leiden 1956, p. 5.

- (20) Ibid., p. 5.
- (21) W. Barthold, Turkestan. p. 68.
- (22) マルクアートの説では大夏は Tukhāra の音譯でもあるといふ。(Marquart, Irānshahr, p. 204)
- (23) Tabari, Tārikh, Vol. 3. p. 245.
- (24) 藤田豊八「慧超傳箋釋」家印本、第五六葉。
- (25) Magoudi, Les prairies d'or, Paris 1861—77, Vol. 2. p. 241.
- (26) Gibb, Arab Conquests, pp. 15—16.
- (27) 慧超傳箋釋、第五三葉裏、第五七葉表。
- (28) W. Barthold, Four studies, p. 10.
- (29) Ibid., p. 13.
- (30) ヘンリー・ニールは卑路斯が據つた波斯は今のシジスタンの一部で、その首府ザランジ Zaranj にいたのであらうと説いてゐる。(H. Yule, Cathay and the way thither, Vol. 1. p. 98. note 1.) これに對し、これをファールス地方のシーラーズとする Pauthier の説などもあるようであるが、シジスタン説以上に妥當なものはないと思う。
- (31) 桑原隲藏「隋唐時代に支那に來住した支那人について」(東洋文明史論叢所收昭和十九年四版) 頁三〇二。
- (32) 資治通鑑卷二〇二、調露元年七月條註。
- (33) Gibb, Arab Conquests. p. 16—17.
- (34) Magoudi, Les prairies d'or, Vol. 2. p. 203.
- (35) Arthur Waley, The poetry and career of Li Po, London 1950, pp. 103—104.
- (36) Ibid., p. 103.
- (37) Gibb, Arab Conquests, p. 31.
- (38) プハラーからアム河の渡頭に向う途中にあるバイカンドのことは畢國として北史(卷九七)隋書(卷八三)の西域傳安國の

條などに見える。タベリーによればクタイブの攻略のときも主な市民は隊商を組織しシナに赴いていて不在だったという。  
(Gibb. p. 34)

- (39) at-Ṭabarī, *Tā'rikh*, Vol. 5, p. 223.
- (40) *Chronique de Tabari*, trad. de Zotenberg, Vol. 4, p. 162.
- (41) Vámbéry, *History of Bokhara*, London 1873, p. 26.
- (42) W. Barthold, *Die alttürkischen Inschriften und die arabischen Quellen* (Die alttürkischen Inschriften der Mongolei, 2 Vols. 1899) pp. 7—8.
- (43) E. Chavannes, *Documents sur les Tou-Kiue Occidentaux*, pp. 288—289.
- (44) Gibb, *Arab Conquests*, p. 35.
- (45) at-Ṭabarī, *Tā'rikh*, Vol. 5, p. 264.
- (46) *Ibid.*, p. 268.
- (47) *Ibid.*, p. 269.
- (48) Gibb, *Arab Conquests*, pp. 52—53.
- (49) 例えば白鳥博士「粟特國考」(西域史研究下卷)第五節、九姓及び六姓昭武。
- (50) E. Bretschneider, *Mediaeval researches*, London. 1888, Vol. 2, p. 53.
- (51) 藤田豊八、*慧超傳箋釋*、第七十二葉表。
- (52) Ṭabarī, *Tā'rikh*, Vol. 5, p. 361.
- (53) クタイブの死は七一五年八月ないし九月とされ、(Cf. Gibb, *Arab Conquests*, p. 53) 張考嵩の遠征は開元三年十一月(七一五年十二月)のことであつた。
- (53) Gibb, *Arab Conquests*, p. 65.
- (54) *慧超傳箋釋*、第七十一葉裏。

(55) Chronique de Tabari, Vol. 3, pp. 496—7.

附記、本稿を印刷にまわしたのちに、岑仲勉「西突厥史料補闕及考證」(一九五八年四月、上海)を入手した。これによつて細い點で、補正すべき所若干を見出したが續章に譲ることとする。